

## 子どもの想像力の豊かさ

### —創造活動に焦点をあてて—

2011HP009 尾藤仁美

本研究では、新しいものを作り出す創造活動に焦点をあてて、子どもの想像力の特徴を捉えていく。さらに、子どもの想像力が豊かであると感じるのはどうしてなのか明らかにしていく。

想像力とは目には見えないものを思い浮かべる能力のことで、新しいものを作り出す創造活動をするのに必要不可欠なものである。子どもの想像力は1歳半ごろから、以前に見たり聞いたりして経験したことのあるモデルの動作や発話を、モデルがいなくなったときに再現するという延滞模倣の中で見られるようになり、4歳頃から5歳以上になると高度化していく。

子どもがつぶやいた言葉や行動には面白さや意外性があるので、私は子どもの想像力は豊かなものであると感じている。子どもの想像力の特徴と、その豊かさを捉えるために保育園で子どもの創造活動を参与観察した。子どもたちのどのような創造活動にも想像力が溢れており、エピソードとして記述、考察することで、その特徴を明らかにした。子どもたちは想像力を媒介に、模倣で獲得してきた自分ならではの世界を複雑に組み合わせて新しい世界を作っていくということが分かり、想像力は創造活動に欠かせないものであるということが明瞭になった。しかし、なぜ大人は子どもの想像力を豊かに感じるのだろうか、と考えたときに、エピソードの表面に見えた想像世界だけで想像力の豊かさを捉えるのでは、子どもの表現を一部しか理解できないと感じた。そこで、イタリアのレッジョ・エミリア市の幼児教育に特徴的な子ども観を参照して子どもの想像力の豊かさを考察していった。

レッジョ・エミリアで子どもは、素晴らしい可能性や能力が秘められた豊かな存在、と捉えられている。そして大人は、その子どもの内面世界の豊かさをよく知ろうとしている。子どもの内面世界の豊かさは音声言語以外の多様な表現手段(子どもたちの100の言葉)によって現れると考えられていて、大人は見守ることと必要な支援をしながら、子どもがどんな意味をもって活動しているのか、その言葉をききとっている。

このようなレッジョ・エミリアの子ども観で、子どもの創造活動をみていくと子どもの内面世界を垣間見ることができた。子どもの想像力の豊かさは、大人が子どもの言葉をどのように捉えるかという、「大人が子どもをみる眼」で感じることができると分かった。